

仏教

Interview

「死」を遠ざけずに向き合う 先人たちに学ぶ死生観とは

コロナ禍では家族は最期をみとることもできない——。大きな災害が降りかかるたび、人々の死生観は変化してきたが、仏教から考える「死」との向き合い方は。

——新型コロナウイルスの感染拡大により、人々の死生観が変化しているように思います。

家族が新型コロナウイルスに感染したら、みとることもできず、いきなりお骨になって帰ってくる。この状況を目の当たりにしたら、疑問に思

うのは自然なことです。安全志向を取り払い、「どのように最期を迎えるか」を考える手助けをしたいですね。

——安全志向という?

70、80代の人たちに、「あなたの今の目標は何ですか?」と聞く、かなりの数の人が「いい施設に入ること」と言うんですよ。

でも、本人は本当にそんな最期を望んでいるのか。「安全」と「願望」には乖離があります。医学的

に正しくても、自由が奪われてしまいますから。

やり残した思いを持ったまま死んでいく人をたくさん見てきました。願望をかなえることが、人生最後の彩りになり、ご遺族へのケアにもなるでしょう。

——終末医療と宗教は、切り離せない関係なんでしょうか。

心臓が止まるまでがお医者さんの仕事で、そこからが私たちの仕事ですが、その間には大きな断絶があります。

医療界では、死はアンタッチャブルなものなんです。ですが当然、人には寿命がある。医療の限界を知ることも重要な教育です。

——コロナ禍になってから、世代に関係なく死を身近に感じるようになりました。

死を身近に感じることは、ある意味いいことだと思います。今までは、必要以上に「死」を遠ざける傾向があったでしょう。死亡率は100%で、自然な行為なのに、死と生は表裏一体。死について真剣に考えることは、「生きること」を真剣に考えることでもある。

だから、コロナで死をリアルに感じることがよく生きるための重要なステップにつながっていきます。

——災害が多い時代における、宗

教の役割は何ですか?

人々の「心を集める」ことです。

奈良時代、天平12年に天然痘がはやったことをきっかけに、聖武天皇が大仏建立を思い立ち、「誰でもいいから、一本の枝でも一握りの土を集めたい」と呼び掛けました。結果的に国民の半分が関わった一大事業になった。それが、奈良の大仏です。

——天災があるときに、宗教の力が発揮されるんですね。

それからもう一つ、「生を再認識させる」のも宗教の役割です。約1000年前の日本で、人口が150万人減るほどの多くの天災に見舞われてから、それまでは高尚な学問だった仏教が庶民に根付いたんです。災害の多い時代の宗教は、大衆に向けて分かりやすく、核心を突いています。

——今を生きるヒントにもなりそうですね。

『徒然草』や『方丈記』を読むことをお勧めします。混乱の世を過ごした先人たちの死生観を知ることができます。今の私たちには知識と経験がある。だからこそ、改めて読み直すことに意味があるのです。

ダイヤモンド編集部・堀花梨

臨濟宗妙心寺退蔵院副住職

松山大耕

Daikou Matsuyama

まつやま・だいこう / 2003年東京大学大学院農学生命科学研究科修了。埼玉・平林寺で3年半の修行後、06年より現職。宗教の垣根を越えて世界的に活動している。